

第3学年1組美術科学習指導案（学習指導案）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣岡, 誠司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010395

第3学年1組 美術科学習指導案

指導者 廣岡 誠司

1 学習のくくり「美術の『チカラ』」(16時間)

2 共通テーマを軸とした教科カリキュラムの構想図

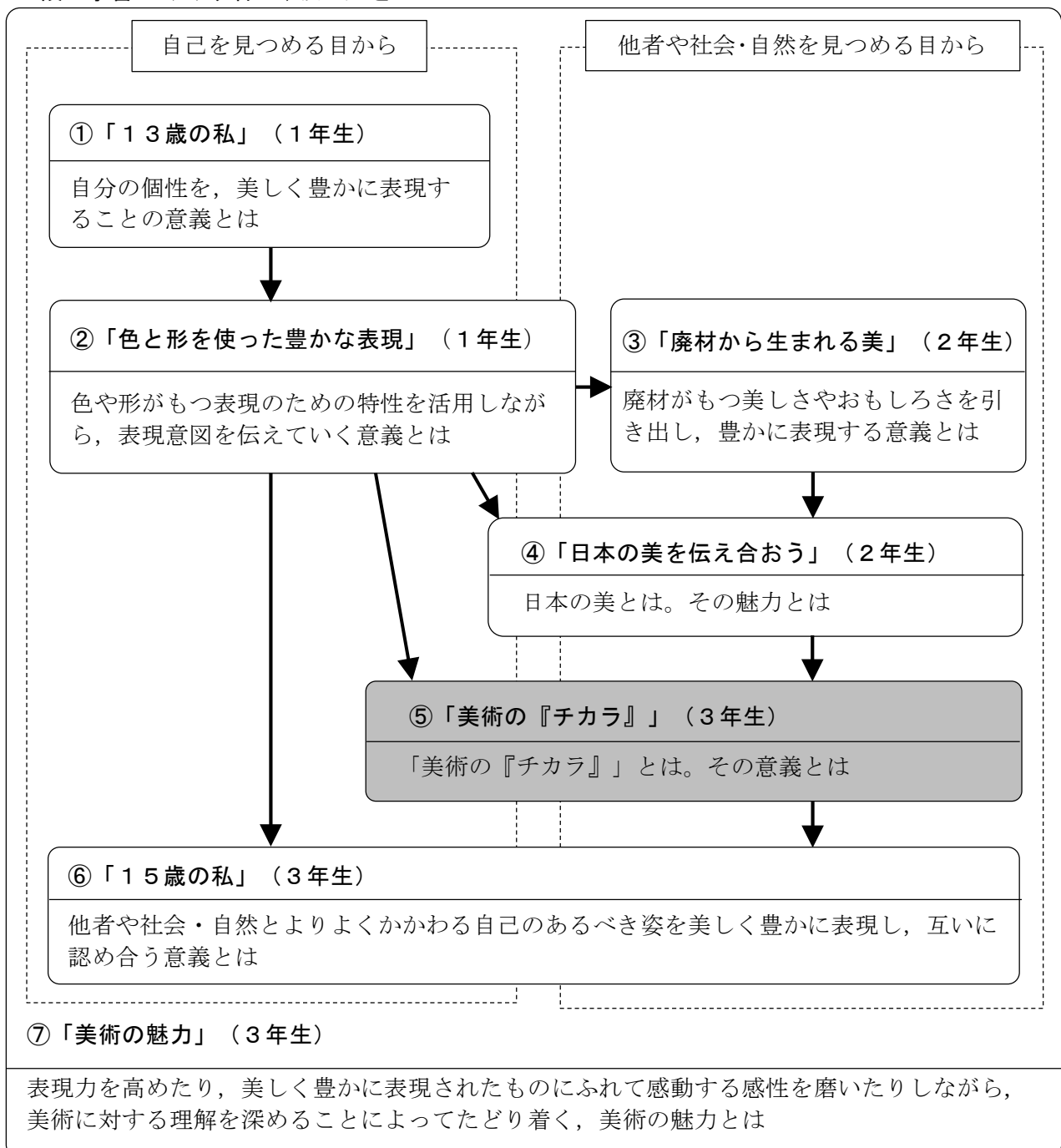
美術科3年間でめざす姿

自他の生活をより美しく感動あるものにしていくために、創造活動の喜びを味わうとともに、豊かな感性や美術の基礎的な力を身につけたり美術文化についての理解を深めたりすることで、美術を愛好する心情と豊かな情操を身につけようとする生徒

美術科3年間の共通テーマ

表現力を高めたり、美しく豊かに表現されたものにふれて感動する感性を磨いたりしながら、美術に対する理解を深めることによってたどり着く、美術の魅力とは

上段：学習のくくり名 下段：共通テーマ



3 学習のくくり「美術の『チカラ』」について

(1) 学習の構想表

学習活動 (下線部 は本時の学習場面)		知識		スキル			情意	
		A 内 容	B 方 法	C 認 知	D 身 体	E 社 会	F 興 ・ 関	G 追 究
ガイ ダ ン ス (1)	《共通テーマと共通課題の理解》 ○世の中にある「美術の『チカラ』」の一部を鑑賞し、他の生徒と情報交換しながら、「美術の『チカラ』」の使い方にはどのようなものが考えられるかを自分なりにまとめる。この活動により、「美術の『チカラ』」の使い方の構造をおぼろげながらにイメージすることで、共通テーマや共通課題に対する理解する。	3		2			2	
		4		3	—	2	3	2
つ か む 学 習 (3)	美術の「チカラ」 の使い方(2)	1	1	2	—	2	2	2
		2	2			3		
	魅力的な画 面構成(1)	1	1	2	—	2	3	2
		2	2	3				
追 究 す る 学 習 (10)	《追究課題の設定》 ○共通課題を受けた追究課題の設定(1) 自分が興味をもったり魅力を感じたりした「美術の『チカラ』」を生かして、生活を美しくする方法を模索しながら、追究課題を明確にする。	3		3	—	3	3	3
	《追究活動》《交流活動》 ○自分が選んだ「美術の『チカラ』」について調査を行う。 (2) ○「美術の『チカラ』」を使って生活を美しくする方法のアイデアを考え、企画書にまとめる。(6)	3		3	—	3	3	3
	○美術や芸術の本質に迫るため、デュシャンの「泉」を鑑賞しながらアートについての考えをまとめ、ワークシートに記述する。 (本時 1 / 1)	3		3	—	3	3	3
つ な げ る 学 習 (2)	《交流活動》《振り返りの記述》 《振り返りの記述の交流》 ○これまでの学習を振り返ったり、実際に「美術の『チカラ』」を使った他の生徒の話を聞いたりして、共通テーマに対する答えをまとめる。(1) ○これまでの学びについて振り返り、仲間と交流して共通テーマに対する考えを深め、最適解を導き出す。(1) 【期待する生徒の表れ】 ・「美術の『チカラ』」を十分に発揮させ、有効に活用する方法を魅力的に提案している。 ・「美術の『チカラ』」の使い方について、その有効性や可能性の大きさを感じながら、社会に出てからもそれらを意識しながら生活していこうとする考えを記述している。など	4		4	—	2	3	4

(2) 本学習のくくりでめざす生徒の姿とその姿に迫るための具体的な手だて

社会における美術の役割をおおまかにとらえると「作品を通して人々に何かを伝えていくこと」と「生活を美しくしていくこと」が挙げられる。後者の「美しく」には、単純に見た目が美しいだけでなく、生活が便利になったり人々の心が豊かになったりすることも含めて考えるべきであろう。技術の発展により社会状況が激しく変化する中で、美術が「生活を美しくしていく」機会は、今後ますます増えていくものと考えられる。

このような状況下で、生徒が「美術科3年間でめざす姿」に迫るためには、社会の中で「美術の『チカラ』」が多く活用されていることを知るだけでなく、そのしくみや人々に影響を与えていくプロセス、有効性等についても理解しておく必要がある。このような「美術の『チカラ』」についての知識を身につけることによって、中学校で得た知識やその発展的な内容が実際に社会の中で役に立っていることを実感できると考える。また、そのような知識の集合体が現代社会を形成しており、自分たちの生活が影響を受けて変化していくことも実感できると考える。

もちろん、その「チカラ」を有効に働かせようとする、美術だけの「チカラ」では実現不可能な場合も多い。他教科で学んだ内容を発展させた「チカラ」が必要になってくる。これらの必要性も実感しながら、主に「美術の『チカラ』」を使うという条件のもと、生徒は自分なりに「美術の『チカラ』」を使って誰かの生活を美しくする方法を考え、提案していく。このような学習活動を通して、本学習のくくりの共通テーマに対する最適解に迫らせていきたい。

そこで、本学習のくくりでめざす生徒の姿を次のように設定する。

世の中の人々が「美術の『チカラ』」をどのように活用しているかをとらえ、その有効性や可能性の大きさを感じながら、その「美術の『チカラ』」を活用する方法を魅力的に提案し、社会に出てからもそれらを意識しながらよりよく生活していこうとする生徒

本学習のくくりでは、上記のめざす生徒の姿に迫るために、次の学習活動に取り組ませる。

まず、ガイダンスでは、ピクトグラムやインダストリアルデザインなど「美術の『チカラ』」を使って生活を美しくしているものの例を多く示す。これらの例を種類分けしながら見つめ直すことにより、実際に世の中にある「美術の『チカラ』」がどのようなものなのか、おぼろげながらに理解させるとともに、その社会的な意義や有用性を意識させる。また、学習計画表を示し、今後の学習活動について確認させるとともに、共通テーマや共通課題を提示して本学習のくくりにおける最適解について、おぼろげながらにイメージをもたせる。

次に、つかむ学習では、自分が興味をもった「美術の『チカラ』」の活用方法や人々に影響を与えるプロセスなどについての理解を深める。この時、色や形などの造形的な要素や全体のイメージに着目させることにより、教科固有の見方・考え方や価値に対する意識をもたせていく。

続いて、追究する学習では、つかむ学習で身につけた造形的な見方・考え方を生かしながら、新たな「美術の『チカラ』」の使い方を模索し、自分なりに提案していく。自分の生き方とのかかわりの中で、興味をもっている分野での新しい提案を考えていくことや、これまでの学習で身に付けた内容を生かしながら活動を進めていくことは、主体的な学びを実現させることにつながる。また、仲間の意見や新たな提案を聞くことで自らの考えを広げるとともに、学習内容に対する広い視野をもたせることができる。このような活動を通して、美術の社会的意義や有用性を実感することができるため、生徒を深い学びに誘うことができると考える。

最後に、つなげる学習では、互いの提案を魅力的に伝え合い、自分がもっていた知識と他の生徒から提供される新たな知識を結びつけながらこれまでの学習を振り返る。さらにその振り返りの内容を交流することにより、視野を広げていく。また、学習のくくり全体を通して、共通テーマを意識させながら学習計画表に振り返りの記述を記入させることで、共通テーマに対する最適解を見いださせることができると考える。

(3) 本学習のくくりの共通テーマと共通課題

共通テーマ (本質的な問いの 階層レベル)	「美術の『チカラ』」とは。その活用方法とは(レベル4)
共通課題	「美術の『チカラ』」を存分に引き出しながら、誰かを幸せにする方法を具体的に提案しよう。

4 本時について(本時14/16)

(1) 本時の目標

【美術への 関心・意欲・態度】	美術作品に対する見方・考え方にもとづき、作品発表時の背景を加味しながら、作品の意味や作者の意図を考えようとする。 (A B 3) × (F 3) ・ (G 3)
【鑑賞の能力】	作品鑑賞を通して、「アート」と呼ばれているものの正体について考えをまとめることができる。 (A B 3) × (C 3) ・ (E 3)

(2) 学習過程

●生徒の活動 ※期待する生徒の表れ	・指導上の留意点 ○支援 ◇評価
●「〇〇アート」という言葉で知っている物をできるだけ多く挙げ、「アート」とは何なのかを考える。 ●本時の学習課題を確認する。	○十分な数の言葉を挙げられない生徒に対しては、「アート」という言葉が含まれていればよいことを伝え、できるだけ多くの言葉を挙げるよううながす。
「アート」と呼ばれているものの正体を突き止めよう。	
●デュシャンの作品「泉」を鑑賞し、なぜこの作品が「アート」なのかを考え、4人グループで話し合う。 ●ドミニク・アングルの作品「泉」を鑑賞し、デュシャンの「泉」が発表されるまでの西洋美術史を振り返る。 ●以下の視点をもちながら4人グループで話し合い、デュシャンの「泉」が「アート」である理由を見つける。 ①男性用小便器の置かれている空間や、その物自体がもっている意味、人間にとって用を足すという行為の意味について考える。 ②通常とは違った向きに置かれている意味を考える。 ③男性用便器を「作品」として選んだ作者の意図について考える。 ●グループで話し合ったことを発表し合い、作品についての理解を深めながら、作者の真意に迫る。 ●「アート」とは何か、自分なりの答えをワークシートに記入し、発表する。 ※美術作品に対する見方・考え方に もとづき、作品発表時の背景を加味しながら、作品の意味や作者の意図を考えようとしている。 ※作品の鑑賞を通して、「アート」と呼ばれているものの正体について考えをまとめ、記述している。 ●本時の学習を振り返り、共通テーマについて考えたことや気づいたことを学習計画表の「気づきのメモ」に記入する。	・デュシャンの「泉」は、「アート」に含まれるものであることを前提として、話し合うよううながす。 ○デュシャンの「泉」を「アート」として認められないという意見をもつ生徒に対しては、その理由を明らかにするよううながす。 ・それまで「美術作品は、時間をかけて作り上げた崇高なものだ。」という常識があったことをおさえておく。 ・デュシャンの泉が発表された1917年当時の社会状況についても簡単に触れておく。 ・話し合いの内容を焦点化することで、話し合いや後のグループごとの発表に対する生徒の主体性を高める。 ○話し合いが進まないグループに対しては、視点を一つに絞り、その答えを自分たちなりに導き出すよううながす。そして、その答えと歴史的な流れ、当時の社会情勢などを加味しながら、作者の意図を推し量るよう助言する。 ○自分たちなりの答えを導き出すことができたグループに対しては、作者がこの作品を発表した意図が何なのかを考えるよううながす。 ・お金を払えば誰でも作品を展示できる展覧会の運営者から、この作品は展示を拒否された事実を伝える。 ・運営者の展示拒否に対し、デュシャンは猛抗議をして騒ぎになったが、この騒ぎが起こったことを告げる。 ・デュシャンはこの展覧会の役員で、偽名を使って「泉」を出品したことを伝える。 ・デュシャンが、それまでの常識を打ち破り、人類が新たな視点をもつことで進化することを願っていたという見方もできることをおさえる。 ・これまでの学びを振り返らせながら、デュシャンの「泉」を切り口にして「アート」に対する考えをまとめ、ワークシートに記入させる。 ・本学習のくくりにおける共通テーマに対してどのような気づきを得たのかを、これまでの気づきのメモを振り返りながら記入させる。 ◇本時の目標について、※印のような生徒の表れが見られたか。